



東洋文化史大系

イスラム諸國の變遷



誠文堂新光社

昭和十三年十二月廿五日印刷
昭和十四年一月五日發行

東洋文化史大系

イラスム諸國の變遷

編纂者

小沼勝衛

發行者

東京市神田區錦町一ノ五
株式會社 誠文堂新光社
右代表者 小川菊松

印刷者

東京市小石川區久堅町一〇八
君島潔

印刷所

東京市小石川區久堅町一〇八
共同印刷株式會社

發行所

株式會社 誠文堂新光社

東京市神田區錦町一丁目五番地

電話神田一自二二二六番
振替東京四五三〇番

イスラム諸國の變遷

目次

一、イスラム研究の意義

石田 幹之助

三大宗教の一としてのイスラム	二
イスラム研究の重要性	三
支那におけるイスラム	四
トルコ・ペルシヤにおけるイスラム	五

二、イスラム世界の展望

内藤 智秀

イスラム文化	六
文化の發祥地と宗教的動亂の中心地	六
世界文化に對する貢獻	七
イスラムの發生	八
マホメットの出現	八
イスラム研究の氣運	九
世界におけるイスラムの位置	二

三、無明時代のアラビヤ

宮城 良造

沙漠的アラビヤ	六
アラビヤの位置	六
幸福なアラビヤ	六

内部の交通と對外交通	一八
アラビヤの住民	二〇
主要な交通路	二〇
種族制度	二三
主な慣習と制度	二三
南北の二大同盟	二四

宗教

種族神と自然崇拜	二六
宗教の中心メツカ	二七
キリスト教とユダヤ教	二七
マホメット出現當時の社會	二六
社會情勢の急變	二六
商業貴族の擡頭	二八
イスラムの前夜	二八

四、マホメット

小林 元

イスラム宣言前後	三
若き時代	三
反逆の精神	三
イスラムの開教	三
忍従の悲劇	三
悲しみの年	三
聖 遷	三
ヤスリブへの移住	三
ヘジラの背景	三
信仰團體と聖戰	三
支持者の獲得	三

信仰團體の強化	四
神聖なトリオ	四
バドルの戰	四
ウフドの戰	四
斬壕の役	四

イスラム・ヘゲモニー

メツカの陷落	四
政策的配慮	五
霸權の確立	五
最後の日	五

五、正統カリフ

小林 元

カリフ制度の成立	五
マホメットの後繼者	五
カリフ制度の基調	五
カリフ政府の計畫	五
イスラミズムの擴大	五
西方拓疆	五
東方侵略	五
メチナ政府の責任	五
カリフの努力	五
統治の基礎工作	五
國家の動搖	五

六、前ウマイヤ朝

小林 元

アラビズムの反動	六
----------	---

ウマイヤ家の擡頭	四
異教的暴政	四
イスラムの褪色	五
世界征服の進行	五
東方経略	六
西方侵寇	七
ダマスクス政府の機構	六
政治的立場	六
行政機關と驛遞制度	六
財政機關と貨幣制度	七
強力政治の矛盾	七
怨嗟の堆積	七
民衆の苦惱	七
没落の形勢	七
七、アッバース朝	
バグダードの造營	六
首都の決定	六
城市の輪奐	六
イスラム的専制主義	六
カリフ制度の完成	六
イスラム聖器の制定	六
カリフ政廳の完備	六
行政組織の完成	六
諸官廳の整備	六
中樞機構	六

小林 元

東カリフ帝國の支配	八
支配地域の範圍	八
東西進軍	八
財政と經濟活動	八
國家財政の基礎	八
治水事業	九
製造工業の發達	九
貿易の隆盛	九
商人の活躍	九
カリフ制度の轉落	九
軍隊の跋扈	九
中央政府の無力化	九
諸獨立王朝の分立	九
バグダードの落城	九
八、ファーターティマ朝	
シーア的イスラミズム	一〇
イドリース朝とアグラブ朝	一〇
ファーターティマ朝の興起	一〇
カイロ政府の生命	一〇
カイロの建設	一〇
盛時の面影	一〇
破滅の悲運	一〇
九、後ウマイヤ朝	

小林 元

小林 元

ウマイヤ家の再生	一〇
建設的努力	一〇
支配權の確保	一〇
政治體制	一〇
コルドヴァ政府の名譽	一〇
首府の繁榮	一〇
農工業の發達	一一
交易の盛況	一一
イスラミズムの後退	一一
ウマイヤ家の衰亡	一一
無政府狀態	一一
グラナダ政府の崩壞	一一
一〇、サラセン帝國の解體	
アジャ	一二
サーマーン國	一二
ガズナ國	一二
カラハン國	一二
アフリカ	一二
トゥルン國	一二
アフシット國	一二
ヨーロッパ	一二
ブルガル國	一二
一一、インド・イスラム諸王朝	

大久保幸次

大久保幸次

アラビヤ人のインド進出	二三
グール國	二三
奴隸王朝	二四
「奴隸」(マムルーク)の意義	二四
諸王の事蹟	二四
ハルジー國	二六
トゥグルク國	二六
一一一、セルチュック・トルコ	大久保幸次
大セルチュック帝國	二六
隆盛期	二六
帝國の分裂	二六
ルーム王朝	二六
東ローマとの抗争	二六
封建諸侯の割據	二六
十字軍	二六
その意義・その経過	二六
文化	二六
制度	二六
宗教界	二六
文藝	二六
一二、オスマンリ・トルコ	大久保幸次
第一期	二六

オスマン一世の鴻業	二六
トルコ人の歐洲進出	二六
第二期	二六
コンスタンチノーブル征服	二六
スレイマン大帝の黄金時代	二六
國家と文化	二六
中央政府の組織	二六
封建制及び軍制	二六
教育制度	二六
第三期	二六
ロシア人との抗争	二六
「チュールリップ時代」の文化	二六
第四期	二六
「革新」の諸業	二六
ハミット帝の恐怖政治	二六
第五期	二六
青年トルコ黨の新政	二六
トルコと世界戦争	二六
オスマンリ帝國の崩壊	二六
一四、トルコ共和國	大久保幸次
國民鬭爭時代	二六
獨立戦争	二六
ローザンヌ條約	二六
建設時代	二六
共和國國民黨	二六

宗教傳統打破	二六
文字革命	二六
國語整理と國史尊重	二六
教育制度の刷新	二六
女子解放	二六
經濟界の振興	二六
交通の發達その他	二六
一五、民族運動の進展	大久保幸次
トルコ民族	二六
初期の民族主義	二六
ツラン主義とトルコ主義	二六
共和國の國民主義	二六
イデル・ウラル・トルコ人その他	二六
アラビヤ及びイラン民族	二六
アラビヤ民族運動	二六
一六、イスラム教の教理	大久保幸次
コーラン	二六
その形式	二六
その内容	二六
コーランの補助	二六
正統四學派	二六
イスラムの意義	二六
信仰	二六
神	二六

天使・經典・豫言者……………二〇二
來世と天命……………二〇三

勤行の普遍性……………二〇四

信仰の告白……………二〇六

イスラムの寺院と禮拜……………二〇七

斷食・巡禮・喜捨……………二〇八

道德その他……………二〇九

無我の愛……………二一〇

家庭と戒律……………二一四

宗派……………二一五

シーア派……………二一五

ワハビー宗……………二一六

一七、イスラム法制及び法學

飯田 忠純

イスラム法制の構成……………二一八

イスラム法制の特質……………二一八

イスラム法制の法源……………二一九

イスラム法制の效力……………二二〇

イスラム法學の發展……………二二三

イスラム法學の意義……………二二三

法學の成立……………二二三

法學の發達……………二二三

法學の轉換……………二二五

イスラム法制の内容……………二二五

法制の體系……………二二五
イスラム法制における外法繼受……………二二七

一八、サラセン文學

小林 元

沙漠的文學の發生……………二二八

文學的言語の出現……………二二八

詩人の立場……………二二九

哀歌と戀歌……………二二九

頌歌の構成……………二二九

物語の發達……………二二九

イスラムと文學……………二二九

コーランの意義……………二二九

豫言者と文學……………二二九

アラビズムの復活……………二二九

前ウマイヤ朝と文學……………二二九

戀愛詩と諷詩……………二二九

イラニズムの吸收……………二二九

ペルシヤ文學の誘惑……………二二九

宮廷詩人の群……………二二九

古典的詩歌の新生……………二二九

思想的詩歌の傾向……………二二九

散文精神の發達……………二二九

民衆の娛樂と文學……………二二九

物語師の存在……………二二九

千一夜物語……………二二九

影繪芝居……………二二九

サラセン文學の遺跡……………二二九

一九、アラビヤ音樂

飯田 忠純

アラビヤ音樂の輪郭と發達……………二二九

音樂の輪郭……………二二九

音樂の傳統……………二二九

音樂文化の擡頭……………二二九

音樂理論の發達……………二二九

樂器……………二二九

ラバーブ……………二二九

ウード……………二二九

アラビヤ音樂と現代音樂……………二二九

數學的音程の檢出……………二二九

アラビヤ音樂の近代への影響……………二二九

二〇、イスラムの建築及び美術

伊東 忠太

總論……………二二九

廣大な範圍……………二二九

建築の重要性……………二二九

建築總説……………二二九

起原……………二二九

通性……………二二九

宗教建築……………二二九

非宗教建築……………二二九

樣式の分類……………二二九

建築各説……………二七四

アラビヤ・シリヤ……………二七四

エジプト……………二七六

メソポタミヤ……………二七六

ペルシヤ……………二七六

トルキスタン……………二七九

アフガニスタン・イスパニヤ……………二八〇

北アフリカ・セルチュック……………二八二

トルコ……………二八三

印度……………二八五

支那……………二八六

工 藝……………二九二

繪 畫……………二九二

金 工……………二九三

陶磁工・玻璃工……………二九四

石工・木工・染織・刺繡……………二九五

二二、サラセンの學術

飯田 忠純

由來と特色……………二九八

アラビヤ學術の價值と分類……………二九八

外來文化の移植と學術の發展……………二九八

學術發展の契機としてのアラビヤ語……………三〇〇

數 學……………三〇一

アラビヤ數學の特色……………三〇二

アル・フワーリズミーとその代數學的方法……………三〇三

ギリシヤ數學派とインド數學派との對立……………三〇三

アラビヤ算術とアラビヤ數字……………三〇四

アラビヤ幾何學……………三〇五

三角法に傑出したアラビヤ數學者達……………三〇六

天文學……………三〇七

アラビヤ天文學の世界性……………三〇七

子午線度長の計算と地球球形説の先驅……………三〇七

アストロラーブ(測天儀)の發達……………三〇八

アラビヤ天文學の東傳……………三〇九

アラビヤ天文學の西漸……………三〇

地理學……………三一二

アラビヤ地理學の發端……………三一二

イブン・フルダードバーとクダーマ……………三一二

旅行記・見聞録の簇出……………三一二

地誌の系統化起る……………三一二

自然地理學の發達……………三一二

世界知識の擴大……………三一二

地理學全書と地名辭典……………三一二

歴史學……………三二八

歴史的知識の發生……………三二八

修史學の發達……………三二九

イブン・イスハークその他……………三三〇

イブン・ハルドゥーン……………三三二

イブン・ハルドゥーンの「世界史」……………三三三

理化學……………三三四

光學の發達……………三三四

比重の測定・槓杆の理・水力の應用……………三三五

鍊金術より化學へ……………三三五

昇華・蒸溜・濾過・金屬の研究……………三三六

工業製品・工藝品及び發明……………三三七

醫 學……………三三九

サラセン醫學の地位……………三三九

醫學の發達……………三三九

サラセン醫學の特色……………三三九

博物學……………三三三

サラセン博物學の系統……………三三三

サラセン博物學の内容……………三三四

博物學的世界觀……………三三六

哲 學……………三三七

アラビヤ哲學の出發……………三三七

アラビヤ哲學の發展……………三三八

東方アラビヤ哲學の組織……………三三九

西方アラビヤ哲學の大成……………三四〇

イブン・ハルドゥーンの實證主義……………三四二

一二、結 論……………大久保幸次

イスラム世界の現出……………三四二

イラン主義の反映……………三四三

トルコ民族の飛躍……………三四四

汎イスラム主義より民族主義へ……………三四七

國民主義の勝利……………三四九

二三、支那における

回教徒の現情

三橋 富治男

アジャの黎明	三三〇
支那回教徒の社會	三三〇
華北・蒙疆の回教徒	三三四
西北地帯の回教徒	三三六
新疆省の回教徒	三三八
蔣政權の回教對策	三六三

二四、印度及び西アジア概観

田邊 宗夫

はしがき	三三四
印度回教徒概観	三三四
アラビヤの動向	三七七
トルコ、イラン、エジプト	三七七
むすび	三七六

(目次了)

寫眞目次

原色版

聖典コーランの序章
ブレヴェザの大海戦
ダブルトーン

イスラムの靈場カーバ
アルハンブラの中庭
トルコのイスラム寺院
ケマル大統領の獅子吼

一、イスラム研究の意義

イスラムの神聖な標語……………一
支那陝西省長安清真寺……………二
支那廣東省廣州番禺懷聖寺……………三
支那北平清真寺……………五

二、イスラム世界の展望

聖地メッカの圖……………六
チムル像……………七
ナヂル・シャ……………八
イスタンブル廠學圖……………九
トルコ帝國の中央政廳……………一〇
インド獨立運動圖繪……………一一
新舊トルコ文字……………一二
新興トルコ共和國首府と勸業銀行……………一三
アヤ・ソフィヤ寺院本堂……………一四
イスタンブルの戦勝記念碑(一頁)……………一五

三、無明時代のアラビヤ

カラヴァンの憩ひ……………一六
バフラインの風景と用水……………一七
オアシスのほとり……………一八
アラビヤの沙漠……………一九
ナブリードの沙漠……………二〇
バフラインの遺跡……………二一
アデンの眺望……………二二
ヤマンの都市サナー……………二三

アラビヤ草原の牧羊……………二四
サバの碑文と南アラビヤの石彫……………二五
カーバの黒石……………二六
南アラビヤ古代の遺物……………二七
沙漠生活の片影……………二八
ベドウィンの雄姿……………二九
隊商行路……………三〇
天幕の商店……………三一

四、マホメット

アラビヤの駱駝追ひ……………三二
アラビヤの商人……………三三
天啓をうけるマホメット……………三四
豫言者マホメット……………三五
聖典コーランの扉……………三六
メデナの遠望……………三七
聖遷の際のマホメット……………三八
神聖家族……………三九
聖字カーバ(一頁大)……………四〇
メッカのモスク……………四一
戰鬪的マホメット……………四二
戰場のマホメット……………四三
天國飛行圖……………四四
カーバの黒石と豫言者……………四五
マホメットと豫言者の廟の眺望……………四六
豫言者の廟の一景……………四七

五、正統カリフ

アブー・バクルとウマル一世……………四八
ウスマーンとアリー……………四九
慕進するアラビヤ人……………五〇
アラビヤの騎兵……………五一
サーサーン朝ベルシャヤ王の面影……………五二
聖典の斷片……………五三
ファティーマの墓……………五四
サラセン・パピルスの斷片……………五五
カリフ・ウスマーンの弑殺……………五六
カリフ・アリー……………五七

六、前ウマイヤ朝

サラセンの戰士……………五八
ジブラルタル全景……………五九
イエエルサレムのモスク……………六〇
サラセン貨幣……………六一
ダマスカスのモスク……………六二
サラセン建築勞働者圖繪……………六三
モスクの横斷面……………六四
アラビヤの浴場……………六五

七、アッバース朝

チグリス河とバグダード……………六六
バグダードの俯瞰……………六七
モスク造營……………六八
ハールーン・アッラシード……………六九
カリフの碑文……………七〇
サラセン帝國の公文書……………七一
サラセン軍隊行進曲と軍樂隊……………七二
シラーズの遠望……………七三
モスクの展望……………七四
タブリーズの風景……………七五
サラセン帝國人頭稅受領證……………七六
サラセン舞妓と宮廷生活の一景……………七七
扉の鏡板の透彫……………七八
サラセンの世界知識……………七九
バスラの風景……………八〇
サラセンの壺と青銅鉢の圖案……………八一
サラセン隊商の活躍と商船……………八二
バグダードの商店……………八三
テヘランの隊商宿……………八四
カリフ・アル・ムスリッキル……………八五
サーマッラーの廢墟……………八六
旭烈兀汗の肖像……………八七
バグダードの陷落……………八八
フエズの瞰望……………八九
サラセン軍の活躍……………九〇

八、ファティーマ朝

フエズの瞰望……………九〇
サラセン軍の活躍……………九一

カイロの俯瞰……………九二
カイロのナスル門……………九三
サラセンの陶器皿……………九四
アズハルのモスク……………九五
サラセンの水晶水差……………九六
サラチンの城(一頁大)……………九七

九、後ウマイヤ朝

コルドヴァのモスクの外景……………九八
コルドヴァのモスクの列拱(一頁大)……………九九
モスクの天蓋……………一〇〇
アンドルシヤ絹織物……………一〇一
サラセンの家牙細工匠……………一〇二
サラセンの青銅洋燈……………一〇三
サラセンの劍と兜……………一〇四
グラナダ城……………一〇五
アルハンブラの中庭……………一〇六
アルハンブラの池水宮と拱廊……………一〇七
アルハンブラの壁面……………一〇八
ボアブデイルの肖像……………一〇九
ボアブデイルの遺品……………一一〇

一〇、サラセン帝國の解體

イスバハンのイスラム寺……………一一一
史詩シャーフナーマの一場面……………一一二
イブン・トゥルン寺……………一一三

一一、インド・イスラム諸王朝

クトゥブッディン寺……………一一四
前期インド・イスラム諸王朝の貨幣……………一一五
インドのイスラム建築……………一一六
トゥグルク王宮の歌舞……………一一七
バーブル帝とアクバル大帝……………一一八

一二、セルチュック・トルコ

セルチュックの石彫斷片……………一二九
セルチュックの寺院の内部……………一三〇
セルチュックのイスラム寺……………一三一

イエルサレムの展望……………	一三
コニヤのイスラム寺の内部……………	一三
カラタイ・メドレッセ……………	一三
コニヤのメヴレヴィ・ハネ……………	一四
ジェラールディンの廟……………	一五

一三、オスマンリ・トルコ

オスマン……………	一六
オスマンリ・トルコの貨幣……………	一六
古都ブルサとメフメット一世の陵……………	一七
エディルネのセリミエ寺……………	一八
ボスボラス海峡アジャ城……………	一九
ボスボラス海峡ヨーロッパ城……………	一九
メフメット二世……………	二〇
東ローマの首府を包圍す……………	二〇
十六世紀のイスタンブル……………	二一
イスタンブル金角港……………	二二
アジア大陸を望む……………	二三
ベルグラード攻圍の圖(一頁大)……………	二三
トルコ帝のウィーン攻撃……………	二四
バルバロス……………	二四
賢相ソコリ・パシャ……………	二五
高官達……………	二五
立法者スレイマン帝……………	二六
スレイマン一世の凱旋……………	二七
トルコの通譯官……………	二七
スレイマン一世の行列……………	二八
イエニチエリの紋章……………	二九
イエニチエリ(一頁大)……………	二九
スルタンの前で講演する……………	三〇
イエニチエリの馬上競技……………	三〇
トルコの古刀……………	三一
詩聖フズリ……………	三一
スレイマニエ寺……………	三二
スレイマニエ寺内部……………	三三
建築家シナン……………	三四
トルコの古瓶と古壺……………	三四
トルコの釉瓦……………	三五
カザン市のハン・メスジディ……………	三六

アフメット一世寺……………	三六
チュリッパ時代宮中の行樂……………	三六
アフメット三世施水臺……………	三六
トルコの珈琲店……………	三六
マフムット二世とメフメット五世……………	三六
ミトハット・パシャ……………	三六
ジャ・パシャ……………	三六
オスマン・パシャ……………	三六
トルコ最初の民間新聞……………	三六
エンヴェル・パシャ……………	三六
イスタンブル全景……………	三六
聖戰の布告……………	三六
ダルダネルの海戰……………	三六
ガリポリ爭奪戰の驍將……………	三六

一四、トルコ共和國

シヴァス會議……………	三六
決死のトルコ國民軍……………	三六
メフメット六世……………	三六
イズミル港展望……………	三六
ローザンヌ會議トルコ委員……………	三六
レフエット・パシャ……………	三六
アンカラの都市街……………	三六
トルコ大國民議會會議事堂……………	三六
共和國民黨旗……………	三六
ケマル・アタチュルク……………	三六
參謀總長フニヴジ・パシャ……………	三六
宰相イスマット・パシャ……………	三六
「國民の家」……………	三六
「國民の家」の内部……………	三六
外相テグ・フィック・リュシュテュ……………	三六
大國民議會議長キヤジム・パシャ……………	三六
新トルコ文字を習ふ……………	三六
新トルコ文字を宣傳する……………	三六
トルコ史調査會……………	三六
トルコ新聞の今昔……………	三六
トルコ大學……………	三六
ハリデ・エディブ・ハムム……………	三六
トルコの女裁判官……………	三六
トルコの村民教育……………	三六
節約及び國產週間の大會……………	三六
ローマ字の小學讀本……………	三六

一五、民族運動の進展

イブラヒム・シナシ……………	三六
テヴフィック・フィクレット……………	三六
ナミック・ケマル……………	三六
アブデュル・ハック・ハーミット……………	三六
ジャ・ギョク・アルプの民族主義的……………	三六
理想……………	三六
メフメット・エミンの詩の一節……………	三六
アクチュラオウル・ユスフ……………	三六
キョプリュリ・ザデ・ファット……………	三六
ロシヤにおけるトルコ民族主義者……………	三六
メルジャニ……………	三六
イスマイル・ガスプリンスキー……………	三六
アブドゥルラー・トカイ……………	三六
アヤス・イス・ハキ……………	三六
クリムリ・ジャーフェル・セイタメ……………	三六
トルコ民族解放運動の機關紙……………	三六
メフメット・エミン・ベイ・レスル……………	三六
ザデ……………	三六
トルコの國民運動大デモ……………	三六
インド各宗徒首領の會合……………	三六
イブン・サウード……………	三六
フサイン・イブン・アリー……………	三六
イスマーム・ヤフヤ……………	三六
ムスタファ・チカイオウル……………	三六
前イラク王フアイサル……………	三六
エジプト王ファッド一世……………	三六
ハジ・アミン・アル・フサイン……………	三六
アフガン王ザヒル・シャー……………	三六
リザ・パフラービー……………	三六
コーラン……………	三六
コーランの第四十章……………	三六
マレイ人のコーラン……………	三六
節字のコーラン……………	三六
イスラム教の珠數……………	三六
イスラム教の教役者……………	三六
イスラム教の寺院……………	三六
トルコ風呂の一部……………	三六
寺院境内の洗水盤……………	三六
タージ・マハル寺……………	三六
イスラム教徒の戶外禮拜……………	三六
イスラム・シーア派寺院……………	三六
禮拜堂の毛氈……………	三六
イスラム寺院の内部(一頁大)……………	三六
イスラム教禮拜の型……………	三六
ベルリンのイスラム寺……………	三六
ラマザンの夜の輝……………	三六
聖地巡禮……………	三六
巡禮者のデスト……………	三六
シーア派の寺院(一頁大)……………	三六

一七、イスラム法制及び法學

エジプトの嫁入行列……………	三六
エジプト結婚風俗……………	三六
サラセンの裁判官……………	三六
アラビヤ婦人の家庭生活……………	三六
聖典を讀む人々……………	三六
街頭の説教……………	三六
アラビヤの數瓦……………	三六
ペルシヤお伽話の挿繪……………	三六
イスラムの葬行列……………	三六
イスラムの墓……………	三六
駱駝の描寫……………	三六
オアシス風景……………	三六
爐邊のアラビヤ婦人……………	三六
耕作者の生活……………	三六

一八、サラセン文學

駱駝の描寫……………	三六
オアシス風景……………	三六
爐邊のアラビヤ婦人……………	三六
耕作者の生活……………	三六

沙漠の怒り……………	三三
沙漠的サロン……………	三三
龍退治の圖……………	三三
コーランの一節……………	三四
アラビヤ語教科書……………	三五
アラビヤ字の書道……………	三五
サラセン模様の一片……………	三七
ペルシヤ文學の片影……………	三八
ペルシヤ詩人の作品(一頁大)……………	三九
サラセンの學園……………	三九
サラセン詩人の姿……………	四〇
サラセンの風俗……………	四〇
ハリリー一の書の挿繪……………	四一
サラセン人舟行の圖……………	四一
イスラムの説教の圖……………	四二
サラセンの講筵……………	四二
宮廷生活の斷片……………	四三
街頭の物語師……………	四四
千一夜物語……………	四四
アラビヤン・ナイト物語の一景……………	四五
サラセンの街とサラセンの港……………	四五
サラセンの影繪とトルコの影繪……………	四五
サラセンの書籍……………	四五
リチャード・パートン……………	四五
パートン譯千一夜物語……………	四五

一九、アラビヤ音楽

アラビヤ音楽合奏……………	五五
アラビヤの樂器……………	五五
樂器コードの圖……………	五五
アラビヤ樂器スズハ……………	五五
東方式ラバブ・マウル式ラバブ……………	五六
ラバブを弾く……………	五六
マウル人樂器カメンジャー……………	五六
東方式カメンジャー……………	五六
エル・ム・アイヤド(一頁大)……………	五六

二〇、イスラムの建築及び美術

エル・アクサ寺……………	五六
メフメット・アリー寺院……………	五六
シリヤ沙漠内の村落……………	五六
スルタン・ハサン寺院……………	五六
北平清真寺の禮拜堂……………	五六
コルドヴァ寺院内部……………	五六
ダマスカス市街風景……………	五六
ジャマ・マ・スジッドの巨拱……………	五六
セヴィリヤのデラルダ……………	五六
エルサレム・ウマル寺……………	五六
エル・アザル寺院……………	五六
アムル寺院の列拱……………	五六
カイト・ベイの墓……………	五六
カラットの光塔……………	五六
ホスルーギルドの光塔……………	五六
スルタン・ムハンマッドの墓……………	五六
帖木兒の墓……………	五六
ウルグ・ベグ・メドレッセ……………	五六
ガズナ光塔……………	五六
アルカザル寺院内部……………	五六
ルーム國の石彫斷片……………	五六
コニヤの建築……………	五六
アフメット寺内部……………	五六
スレイマニエ寺内部……………	五六
アフメット水盤舎……………	五六
クトゥブ塔……………	五六
クトゥブ・イスラム寺遺址の門……………	五六
イルトゥトゥム・シュウの陵墓……………	五六
シヂ・サイイド寺の窓……………	五六
モグル朝代の建築……………	五六
エチマト・ウッダウラーの墓……………	五六
タージ・マハル廟……………	五六
廣東懷聖寺の光塔と天津禮拜寺……………	五六
北平清真寺禮拜堂内部……………	五六
廣州イスラム寺院内部……………	五六
ペルシヤの繪畫……………	五六
近世イスラム繪畫……………	五六
ペルシヤの金象嵌鐵甲……………	五六
エジプトの金銀象嵌の青銅皿……………	五六

小アジア・ブルサ市・イエシル・ジャミヤ面裝飾……………	五六
十六世紀頃のトルコ製の釉瓦……………	五六
十三世紀頃のシリヤ製玻璃……………	五六
コニヤ發見の十三世紀頃の木扉……………	五六
十六世紀頃のペルシヤの絨氈……………	五六
一六〇〇年頃のペルシヤ製の錦……………	五六

二一、サラセンの學術

カイロの寺小屋……………	五六
カイロの書店……………	五六
トルコ街頭風俗……………	五六
砂上に書く……………	五六
今日のイスラムの學生……………	五六
魔術のインク鏡……………	五六
アラビヤの天體圖繪……………	五六
サラセンの星座圖と天文研究……………	五六
アラビヤの測天儀……………	五六
ウマル・ハイヤム……………	五六
イブン・トゥールーン……………	五六
バグダードの風光……………	五六
サラセンの隊商……………	五六
カイロ婦人の外出……………	五六
笛吹く人……………	五六
アフガニスタンの首府……………	五六
ペルシヤ王立學校……………	五六
詩人フィルダウシ……………	五六
サラチン……………	五六
インドのお伽話の國……………	五六
トルコの書記……………	五六
ペルシヤの診……………	五六
典型的なアラビヤ人……………	五六
カイロの商店……………	五六
カイロの競技とペルシヤの山水畫……………	五六
藥用植物調劑の圖……………	五六
アラビヤの鍊金術……………	五六
精靈ヂン……………	五六
イスラム信徒等の漁書……………	五六
マテリヤ・メディカの翻譯……………	五六

二二、結論

アラビヤ文字のポスター……………	五六
藥物を求める……………	五六
マイモニデス……………	五六
醫學を學ぶ……………	五六
アラビヤ人の調劑の圖……………	五六
サラセン時代の病床の圖……………	五六
アラビヤの醫者と患者……………	五六
サラセン人の教養……………	五六
悪魔と天女……………	五六
ペルシヤ書體の特色……………	五六
花明に讀書する佳人……………	五六
學者の論争……………	五六
アヴィケンナの墓……………	五六

二二、結論

テヘラン市の廣場……………	五六
マムルーク諸王の陵……………	五六
アッバース大帝……………	五六
最初と最後のトルコのカリフ……………	五六
スレイマン大帝親征圖……………	五六
新トルコ文字を讀む村民……………	五六
トルコの首府アンカラ……………	五六

二三、支那における

回教徒の現情

支那回教徒の風貌……………	三五〇
支那回教徒の禮拜……………	三五一
禮拜する支那の女子回教徒……………	三五二
廣東における古代回教徒の墳墓……………	三五三
北京における清真寺内部……………	三五四
察南張家口清真寺の外観……………	三五五
蒙疆厚利清真寺の外観……………	三五五
陝西の巨頭故馬福祥將軍……………	三五五
入疆の要地星々峽……………	三五七
故楊增新……………	三五八
故金樹仁……………	三五八
若き東干將軍馬仲英……………	三五九
盛世才將軍……………	三六〇
ヨルバス・ハーン……………	三六一
總回の婦女……………	三六一
ホジャ・ニヤス・ハヂ……………	三六二
多装したる東干兵士……………	三六三
飛行機を訪問せる東干……………	三六三

二四、印度及び

西アジア概観

デヒ回教寺院前の信徒群……………	三六四
同印兩教徒の娘達……………	三六六
ウマーン(オーマン)首都……………	三六七
クウェイト王アハメッド・イブン……………	三六七
ジャビル・アル・スバー……………	三六八
アデン港……………	三六九
イブン・サウード王……………	三六九
イラク・カヂマン寺院……………	三七〇
擾亂禍中のパレスチナ……………	三七〇
トルコ・イスタンブールの……………	三七〇
アヤソフイヤ博物館……………	三七一
故ケマル・アタチュルクと……………	三七二
リザーシャの會見……………	三七二
イランの新舊工業……………	三七三

トルコの新大統領……………	三七五
イスメット・イノニユ將軍……………	三七五
トルコ婦人飛行士の行進……………	三七六
埃及カイロ市鳥瞰……………	三七七
(寫真目次了)	

地圖目次

イスラミズムの發展……………	(その一)
イスラミズムの發展……………	(その二)
無明時代及びイスラム宣言前後の……………	一七
アラビヤ……………	一七
無明時代アラビヤ諸族分布圖……………	一七
近代のメッカ……………	一七
近代のメデナ……………	一七
バグダード……………	一七
カイロ……………	一七
ブルガル汗國……………	一七
トルコ共和國地圖……………	一七
(地圖目次了)	



神にかほの「フア」は味意の文ヤビラアのこ
もあでしりな徒使の「ラア」はトツ・ホマくな

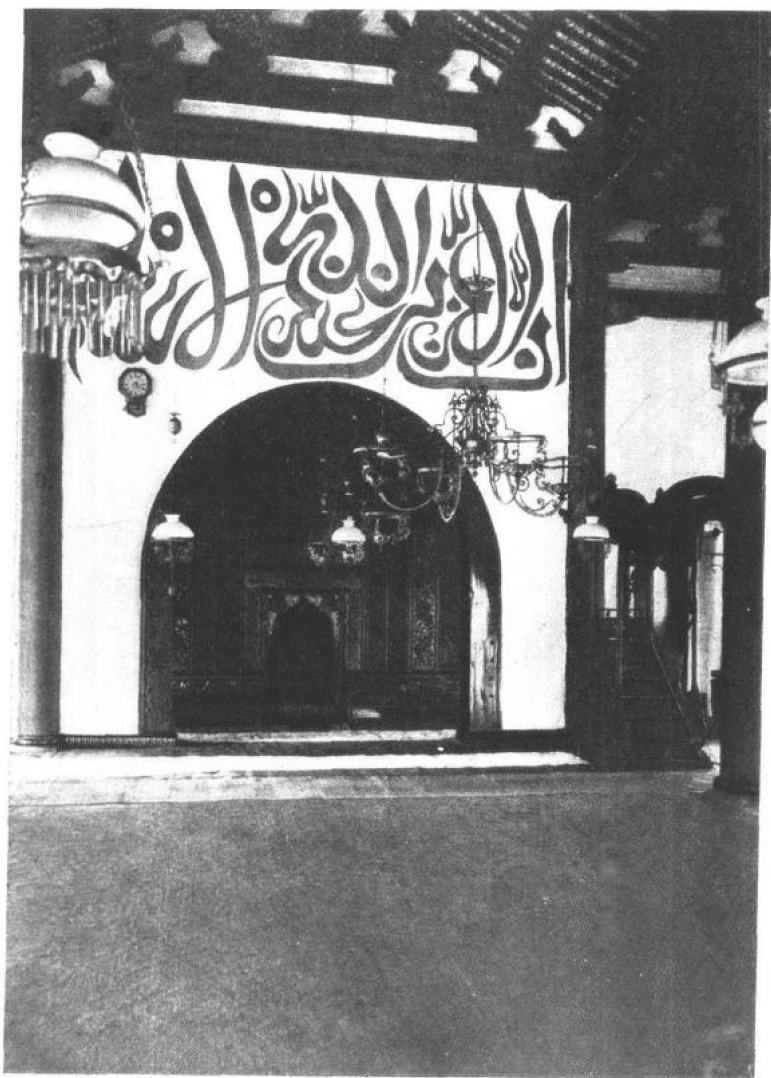
語類な聖神のムラスイ

系大史化文洋東

遷變の國諸ムラスイ

法 學 士	文 學 士	東京帝國大學 名譽教授工學博士	法 學 士	駒澤大學教授	駒澤大學教授	文 學 士	東京女子高等師範 學校教授文學博士	大正大學教授
田邊 宗夫	三橋 富治男	伊東 忠太	飯田 忠純	大久保 幸次	小林 元	宮城 良造	内藤 智秀	石田 幹之助

(執筆順)



支那東省廣州番禺縣聖賢寺 支那東省廣州番禺縣聖賢寺 支那東省廣州番禺縣聖賢寺
支那東省廣州番禺縣聖賢寺 支那東省廣州番禺縣聖賢寺 支那東省廣州番禺縣聖賢寺

西人が或はモンド・イスラミックといひ、イスラミック・ワールドと呼ぶものの存在は儼たる事實である。今若し世界の趨勢を論ずるものがあるとなれば、政治上にも經濟上にも、この一世界を除外して筆を進めることはできないであらう。況や一たびその過去を顧み、歴史に溯る時はイスラム及びその文化のもつ意義には非常に重要なものがある。種々な意味で西洋の中世と近世との轉換期ともなつた十字軍の時代、その幾回かの十字軍を起さしめた機縁を作つたものは要するにキリスト教世界とイスラム世界との衝突であつた。ルネサンスが西洋史上に占むる

位置、その重要さに就いては今更一言の贅辭をも要さないところであるが、そのルネサンスの機運を促したものの一つにはサラセン文化、即ちイスラムの文化があつたことを忘れてはならない。アラビヤの科學が中世の歐洲文明に多大の啓蒙を與へたことはいふまでもなく、サラセン人がよくギリシヤ・ローマの古典文化を傳へてこれを忘れんとするた歐洲の學界に返し與へた功だけでも十分にこれを認めなければならぬ。古今東西、凡百の説話文學の多くを知らぬものでも、「千夜一夜」の物語だけはこれを知らないものはないであらう。近代における歐洲の禍亂の源

といはれたバルカン問題にしても、要約すればイスラム世界の選手たるトルコとキリスト教世界の代表者たる西歐諸國との争とも觀ることが出来る。——かくの如く、思ひ浮ぶがまゝに何の順序もなく擧げ來つてさへ以上の如くイスラムとその文化との史上にもつ意義は甚だ重く且つ深いものがある。しかしそれは果して正當に評價され、十分に研究されて來たであらうか。

イスラム研究の重要性

幸に近頃ではその評價も漸次公平になつて來たやうであり、その研究も甚だ盛になつて來たことは喜ばしい。しかし從來は必ずしもさうでなかつた「イスラム世界」はちやうど東洋と西洋との中間に介在してゐる側の學者からも十分な討究の對象とされなかつた。キリスト教を奉ずる歐洲の學者からいへば、イスラムは一つの「異教」

であり、しかも最も唾棄すべき異教であつた。これを敵視こそすれ、これに同情を注ぎ、これに理解ある解釋を加へんとするが如きものは殆どなかつた。また支那・日本の學界からいへば殆ど全く無關係の世界の如く思はれて誰もその研究に眞面目な努力を費した人はなかつた。しかし近年漸くその意義と價值とが高調せられるやうになり、先づ歐洲にその研究の必要を唱ふる聲があり、次いで最近極東方面においてもや、學問的なイスラム及びイスラム文化研究の熱が昂まるやうになつて來た。西洋においては英・獨・佛共にそれぞれ盛況を呈してゐるが、中でも佛國の如きは最も立派な業績を世に送つてゐるかと思はれる。しかし何といつても他の多くの學問に比し、その發達が極めて近頃の事に屬するだけに、まだまだ研究の行き届かない部面もあり、將來に残された問題も少なくない。況や極東におけるイスラムの歴史、その文化の傳播などに至つては殆どすべてこれからの研究に待つといつていゝくらゐである。

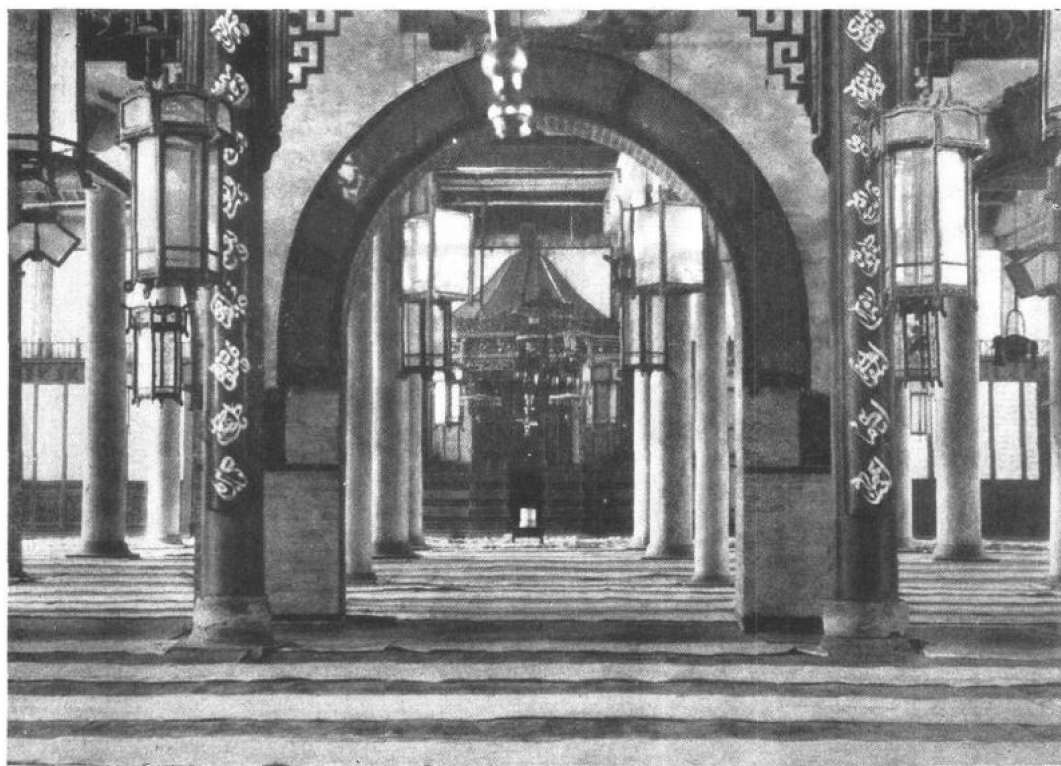
極東におけるイスラム——それは上來擧げ來つたやうなイスラム研究の意義から離れて、また別種の必要と價值とをもつてゐる。殊にわれわれ極東に生を享けたものにとつて特にその感を深くする。イスラムはその教祖の開教後間もなくベルシヤ・中亞を経て陸路支那に入り、また海路南支の海港を経て中國に入つたことは何人もよく知るところである。唐宋時代におけるアラブの貿易などに就いては、我が國の學者によつて歐西の先覺や、本國である支那の學者にも優る立派な研究が發表されたいに就いては支那の學者に少しく指を染めた人があるが、まだ殆ど著しい業績は示されてゐない。タリムの盆地、天山南路の域が古來アールヤ民族の住地であり、獨自の文化をもつた處であつたに拘はらず、十世紀の終末頃、こゝに及んだイスラムの侵迫は遂にこの地方を擧げて完全にその文化圏内に吸収し、全く面目を一變せる世界と化せしめたことなどは西域史上の重大な事件であり、引いて今日のこの地方の形勢の基礎

を作つたものであるが、これなども近時我が國の學者の手で漸くその研究の門戸が開かれたのは喜ばしいが、そのイスラム化の徑路の如きはなほ多くの新人の開拓に待たねばならぬ。擧げ來れば清代における幾度かのイスラム教徒の反亂、その平定の歴史、などから明代以來漸く數を増して來た漢文に譯され、漢文で書かれたイスラムの教義書・史傳等の研究など、攻究を要すべき問題は決してその少きを憂ひない。かくて純學衛上の立場よりするも我等に遺された極東におけるイスラム及びイスラム文化研究の餘地はかくの如く多いのであるが、なほ政治・經濟等の實際よりいふも、我等の意を注ぐべき問題は一二にして止らない。

支那におけるイスラム

支那には今非常に多數のイスラム教徒がある。主として宋・元・明以來の歴史的關係に依つて新疆・甘肅・雲南・河北の方面に最も多くを算するが、その數はぼゞ一千萬と注せられる。(無論支那には完全な統計がないので、巷間傳ふところの數字には非常に開きがあつて必ずどれが正しいとはいひかねるが、八千萬といふが如きは甚だしく過大な見積りとして排するとしても、四五百萬と稱するのはまた少しく過少に失するかの嫌がある。)これらの教徒の信仰狀態、風俗習慣等に就いては今敢て記すことを省くが、それが最も眞面目な、宗教の信者らしい信者であることは大いに注意に値する。

今日の支那には佛教全く廢れ、道教は低級な迷信に墮し、キリスト教も大局から見ればその實勢力何程もなく、宗教らしい宗教としては僅かにイスラム教徒を數へるだけである。我等學者の立場からは餘り實際問題の領域に踏み込むのは何かと思ふ。若し經世家にして現代の支那人の心に何等かの覺醒を與へ、情熱を燃やさしめて沈滞萎微せる大衆を振ひ起さしめんとするならば、我等は先づこの一千萬のイスラム教徒に呼びかけることなどは忘れてならないことであらうと思ふ。この意味におい



支那北平清真寺即同教寺院內裝飾を示す。北平にはかなりのイスラム教徒の寺がある。支那北平清真寺即同教寺院內裝飾を示す。北平にはかなりのイスラム教徒の寺がある。

ても支那におけるイスラムに就いては我等の關心は今後十分深められて然るべきものと考へる。

トルコ・ペルシャにおけるイスラム

我等にとつて特に關心に値するものは獨り支那におけるイスラム教徒のみではない。現今におけるイスラム教國の二大宗たるトルコ及びペルシャにはそれ／＼大使館や公使館が置かれ、内地産業界の目覺しい發展は邦貨の進出先としてこれらの諸國とも經濟關係を基調とする外交關係も漸次繁からんとする。これらの諸國に我が生産品の販路を見出さんが爲には、またその外交交渉を圓滑に導かんが爲には、先づこれら諸國の事情を精細に知る必要があるがその知悉すべきことの中核をなすものは實にイスラム及びその文化であると思ふ。この意味において、本大系が特にその一冊を割いて「イスラム諸國の變遷」と題し、専らイスラム及びその文化の及べる國々を中心として、縦に横に「イスラム世界」の歴史を檢討し、我等が要する如き知識の一斑を一卷のうちに盛つて參考の資としたことは誠に意義もあり、時宜にかなつた企であり、筆者の喜に堪へないところである。

(石田幹之助)



滿洲にける支那回教徒の禮戴